

TOMODACHI J&J 災害看護研修 2018 最終報告会に協力しました (2018/11/15)

テーマ：看護におけるリーダーシップとは

会場：TKP ガーデンシティ PREMIUM 仙台西口（仙台, 日本）

2018年12月2日（木）に TKP ガーデンシティ PREMIUM 仙台西口で開催された TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム 2018 最終報告会に災害医学研究部門の江川新一教授と須田智美修士課程大学院生がそれぞれ協力団体およびメンターとして参加しました。

被災地出身の看護学生からなる研修生たちは、事前研修では災害医療について学び、南三陸の被災地を訪問し、被災地で災害の記憶を伝承しつつけている方との対話を通して、自分たちがどのように何を発信することができるかについて能動的な学習を行いました。

米国研修では、Go Bag、患者移送、除染・トリアージシミュレーション、緊急対応シミュレーション、小児用トリアージなどを通して医療従事者の役割と負担軽減の在り方を学びました。また、911の経験者との対話を通じて、災害を体験した恐怖や大切な人を失った苦しみを、語り伝えることで共有することができると学びました。米国で自分の経験を話すことで、自分との気持ちに向き合うことがつらいことも、仲間からの支えによってプレッシャーや緊張を乗り越えられました。

帰国後に事後アクティビティとして学生個人がそれぞれに企画・運営して、リーダーシップを実践することの難しさ・課題・楽しさ、周囲からのサポートへの感謝、フィードバックをもらうことの大切さや喜びを学びました。

震災から7年が経過し、当時中学生だった4期生は避難や津波の実体験は1期生にくらべても少なく話すほどのことではないと思い込みがちでしたが、体験に大きい小さいはなく、どのように感じたかという思いを共有することの大切さを学びました。

学生個人個人の学びや思いの発表は以下のごとくです。

1. 地域の防災意識の向上を目的に参加し、被災経験者の共通する思いを共有したことで、1人1人の防災意識の向上が大切だと実感。大学で停電体験とマイ避難袋の作成を実施。2日間で学生17名が参加し、防災袋の用意や緊急持ち出しリストの改善などがあつた。発信し、巻き込むこと、形にすることで第一歩が踏み出せた。災害医療に携わりたいという思いが強くなった。
2. 自分と向き合うことができた。米国研修の実践的なトレーニングの体験から自分の能力を超えた企画を立てることが先行してしまい、自分の企画自体に納得できず、中途半端な自分から成長したいと思った。祖母の住む地域が放射能のため避難指定区域。岩手県で地域の被災者から支えてもらった。災害情報について考えるミニワークショップを企画することができた。参加者から多くの気づきがあつた。プログラムを通して自分自身と向き合うことを大切にすることができるようになった。他者に頼れるようになった。自分に自信を持つことができた。
3. 自分自身の成長とこれから。東日本大震災でなにもできなかった自分を変えたい。大きな被災体験がないのに、なにができるのか、恥ずかしい気持ちがあつたが、東日本大震災の姿を知り、伝えることの大切さ、仲間との支えあいがあつた。米国でのスピーチを終えて、自分の経験を伝えることの大切さを知った。自分だけの経験が自信になった。トリアージ訓練を通じて優先順位をつけて治療にあたることを学んだ。黒タグと赤タグの違いを判断することに葛藤した、しかし、その感覚を自分のなかに閉じ込めるのではなく、周りと共有することで負担を減らすことができることを学んだ。感謝を忘れないようにする。

4. ネットワークを広げたい、災害看護の知識を身に着けたい。準備・備えの大切さから「自分にあった防災袋を作ろう！」を企画した。活動の企画にあたって、悩みが多く、焦りや目的が見えなくなることもあったが、自分と向き合うこと、周囲とのかかわり、ニーズ把握のためのインタビューなどを行うなかで、一人で考えるのではなく、相談する必要性に気づいた。今後、災害対策の必要性を伝えることや、学習機会を多く持つこと、ネットワークを広げることを行いたい。
5. 世界の現場を五感で感じたい、実際の災害看護を学びたい、自分を変えたいという気持ちで参加し、自分自身を表出することを学んだ。他の参加者との比較をしてしまう自分がいたが、自分のスピーチを行って新たな自分に気づいた。無力感を押し殺していた。自分の被災体験を過少に思っていた気持ちを表出することで、気持ちが落ち着いていった。見えなかった自分が見えてくる。周囲の人と支えあうことの重要性。避難所運営ゲームHUGを実施するのに、緊張・動揺があった。学生や先生など参加者の存在そのものが心の支えになった。何かを成し遂げるのに支えが必要だと理解できた。アンケートで参加者も達成感を得られたことがわかった。今後、まずは自分自身をケアする。周囲への感謝を忘れず、だれかを支えることを行っていきたい。
6. 自分自身を認める。体験をだれかに話したことがあったか？自分の経験が役立つか？災害看護って何？と感じていたが、自分が何に興味をもつのかを見つけるために参加した。トリアージシミュレーションで大きな影響を受けた。模擬患者をみて、怖い、触れたくないという感じをもち、生死を分けるかもしれない行動に迷ってしまったことが自分でも驚きであり、意外だった。メンターから自分の感じた気持ちを自分で理解することが大切なことを学んだ。こうあるべきと思いつむのではなく、自分の気持ちに素直になることの重要性に気づいた。救急医療の知識を得て、救急医療に携わっていくために、シミュレーションや演習の機会に積極的に参加したい。
7. 震災体験がないことがコンプレックスだった。それを言い訳にはしたくなかった。被災者の体験を聞いて、自分の体験が小さいことがつらかった。救われた言葉は、被災体験を教えてくださいと聞かれたことだった。辛さを告白することができたのは嬉しかった。あなたの患者さんは幸せねという言葉をもらったことがさらに励みになった。自分の気持ちを大切にし、伝えたいと思えるようになった。事後アクティビティでは、避難バッグ演習と学内報告会を企画した。身分証明書、お薬手帳、自分の病気を知ること、米国研修の学びと気持ち、シミュレーション演習の大切さを学んだ。大学院に進学。学生同士でのシミュレーションを企画したい。

などの報告があり、参加した研修者が大きく成長したことがわかりました。

メンターからも学生の成長だけではなく、自分自身の成長にもつながったことが報告されました。数多くあるTOMODACHIプログラムの中で、この災害看護研修はリーダー育成のプログラムです。学生の選考方法にグループワークを導入し、グループ・ダイナミクスに貢献できるかどうかを評価しています。スカイプも利用した面接も導入されています。アルムナイと呼ばれる年代の近い先輩からの学びとともに、主体的に学ぶことを実践してもらっています。災害にも等しい非日常の米国研修でレジリエンスを身に着けることができます。研修したら終わりではなく、学んだことをまとめて、俯瞰し、地域還元型のアクティビティを計画、実施するなかでメンターもともに評価すること、客観的な評価を自分自身で下すことが大切です。

ケアすることと、その意味は、現前性（その場に共にいること）、実際の援助・支援、承認・認められること、肯定すること、情緒的援助、道徳的・人間的な援助です。对人的結びつきの発展、苦しむ人や大切な人を亡くした人に対して「記憶のケア」「社会的ケア」は継続される文化となります。

研修とアクティビティから以下のような成長点が得られたと報告されました。

1. 注意力
2. 判断力
3. 交渉力
4. 説明力（プレゼン能力）
5. 学習意欲
6. 忍耐力

国際看護活動に必要な能力、国境なき医師団やJICAが求める人材にかなう能力が身につけられたことが報告され、最後に、問題意識を持ち続けることの大切さが強調されました。「責任感」「高いスタンダード」「予想する力」を掲げながらこれからの人生を歩くことであるとされました。看護師として、一人ひとりが違う対象者をケアすることは答えのない問を考え続けること、正解を他に求めるのではなく、自分で考え行動する習慣を身に着けることが強調されました。

第3期で参加したアルムナイ（同窓生）からも報告がありました。成長し続けることについて、プログラム参加前はリーダーシップは苦手で、自分の想いを伝えることに難しさを感じ、研修中も無力やもどかしさを感じたが、強味や可能性を引き出してもらったそうです。新たな決意として、災害時に一人ひとりの生活と健康を守る、多様性のなかで個人に最も適切な支援を考えていける保健師になりたいという気持ちから、大学に編入して保健師になるという進路に合格したそうです。プログラムでの経験、自信、発信力が一生の原動力となるため、新たなステージに向かい、自分の強みに気づいて、想いに向き合い、助け合って頑張ってください！という言葉がありました。

ジョンソン＆ジョンソンのChief Medical Officerの久保裕司医師からも挨拶があり、石巻赤十字病院で外来をしているときに震災が発生したことを経験したことが話されました。研修参加者の成長を見られることの感動、Our Credoという社の規範に基づいた社会貢献をしていること、多くの協力者によってこのプログラムが可能になっていることが述べられました。

会場には多くの参加者があり、懇親会の場で積極的な交流がなされました。次年度以降に研修に参加するかもしれない看護学生からも多くの参加があり、今後の継続が期待されます。



最終報告会でたくましく成長した笑顔をみせる研修者たち。

これから看護師として人間として大きく成長することが期待されます。

<https://tjdnt2015.wordpress.com/category/2018-student-reports/>

にある参加ブログより引用。研修のより詳しい情報が閲覧できます。

文責：江川新一（災害医学研究部門）